員に備わるのみ
―大久保一翁にみる敗戦処理の美学―

細野 哲弘
独立行政法人 エネルギー金属鉱物資源機構 理事長
（元 特許庁長官　元資源エネルギー庁長官）

冲方丁に「麒麟児」という歴史小説がある。江戸城無血開城を成し遂げた勝海舟と西郷隆盛の奮闘を描いた、歴史好きにはお馴染みのテーマである。江戸に迫る倒幕軍に対し、「彼らが幕府の提示した条件を呑まなければ江戸の街を焦土化する」という手筈を整えたことを突き付け、西郷隆盛とのぎりぎりの折衝をして、江戸城総攻撃直前での無血開城という「離れ業」をやってのけた有様を、勝海舟の視点から描いたものである。勝海舟らしい息遣いが横溢していて、海舟ファンならずとも、なかなかに楽しい。その中に、折衝の最中「1日返事を待ってほしい」と西郷に頼み込んで城に戻った海舟が、「おーい、そっちの方は上手くいっているか？ それ次第で明日の返事が変わるんだよ。」と幕臣に問いかける段がある。

「そっちの方」って、なんだ？ 問いかけられた幕臣って、誰なんだ？ 脚光を浴びて表舞台で見栄を切る千両役者勝海舟を裏方実務で支えた人といわれてもなあ……？ 一朝ことあらば海舟の号令一下、江戸を火の海にするという手筈を仕切った町方の侠客や火消の頭たちはともかく、この時の幕府江戸城にあって実務を切り回した事務方なんて殆ど聞いたことがない。でも、これだけの仕業は確かに裏に誰かシッカリした御仁がいないと、舞台が回らないなあ……！ とは思う。本稿は、そんな「そっちの方」で活躍した「縁の下の力持ち」の幕臣の話である。

これまでも、本誌の紙面をお借りして幕末における「筋を通した幕臣」の生き様をいくつか紹介してきた。攘夷か開国か、抗戦か恭順か、公武合体推進か否かなど、それぞれの局面で体制側にあっても立場の違いがあった。最終的に徳川家は恭順し、新政府への移行となったのであるが、討幕軍が江戸に迫る中で徹底抗戦を主張した立論は、実質においても感情論においても、当時の幕閣において説得力があった。小栗上野介忠順、岩瀬忠震、水野忠徳など、開明的であり国の将来への設計図を持って、討幕軍には抗戦すべし、そしてその上で国を開くべしと奮戦した人々の姿に、なお共感するところが多い[1)]。

一方、冷静に改めて当時の状況に立ち還ると、恭順を唱えて謹慎した徳川慶喜は自分では動けなかった。従って、その意向に即して舞台を回すためには、ともすれば暴発的かつ悲壮的な英雄行動に走りがちな抗戦派に敢然として対峙し、恭順の実が全うできる環境を整える者が幕府内に不可欠であった。それを担ったのは誰であったか。それを支えた思想とはどんなものであったのか。

「恭順」とは全き意味において「降伏」であり、幕臣としてその屈辱的な意味合いを甘受して、なお譲れない一線を確保しつつ「敗戦処理」を進めるということは至難の業であった。その象徴のひとつが「江戸城無血開城」であった。

本稿の主人公の名は、大久保一翁忠寛。一翁は隠居後の号である。武家の男子の慣らいで、度々名前が変わるが、以下分かり易さを旨として「一翁」で統一する。また、一翁の治績の紹介については、福地源一郎（桜痴）や松平春嶽などが遺した文書や、一翁が出した手紙を相手が残したものなど第三者の記録から引用することが多いのだが、それは彼が自

1) 小栗上野介については本誌第289号「以って瞑すべし」、岩瀬、水野については同第292号「男子の義肝堅きこと鉄の如し」を各々参照。

大久保一翁像
（晩年の肖像 近世名士写真其2より）

らの日記や文書を焼却破棄してしまい、一人称の資料が極めて少ないからである。その点は、本稿における彼の「表の相棒」である勝海舟が、自著（「氷川清話」など）も評伝も多いさまと好対照をなしている。この辺りの機微、所以については、追って改めて触れたい。

「相棒」と記したが、一翁と海舟は、断末魔の混乱の中にあった幕府における「恭順派」の代表であり、徳川家臣団の中においても、又討幕軍からもそのように認識されていた。この二人は目指すものは同じであったが、この二人ほどその取り合わせの珍しいモノもなかった。勝海舟は、微碌（四十一石）で非役の俄か御家人を父（小吉）に持つ下層の無名幕臣であった。「俄か」というのは、その御家人という地位の株を、海舟の祖父である男谷が検校として稼いだ金で小吉に買い与えたものであったからである。

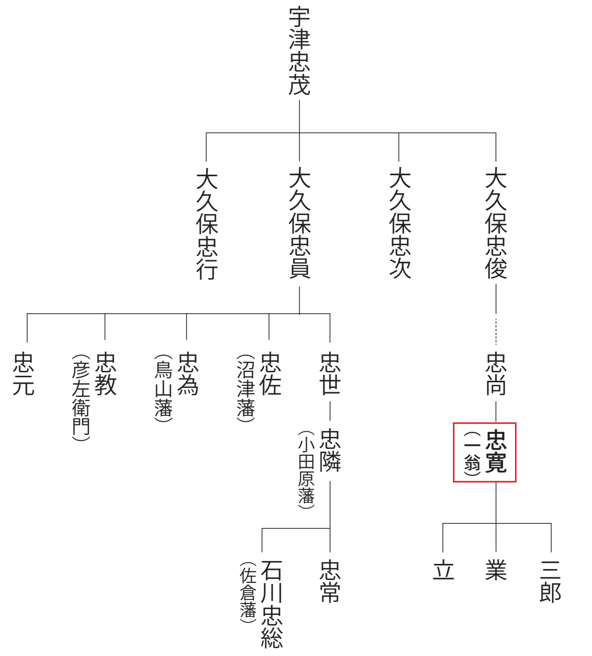
かたや、大久保一翁は、小碌（五百石）ではあるものの三河以来の歴とした譜代の旗本で、小姓組番頭など中堅要職を務める家柄の惣領息子である。一翁自身も14歳にして将軍家斉の小姓として出仕して順調な出世コースをスタートさせたエリート幕臣であった。

しかし、その違いにも拘らず、このあと順に触れていくが、「国際情勢と国柄に鑑みると、徳川家が政権を独占・私有するのは誤りであり、政権は朝廷にお返しして日本人全体で政治を仕組む形にし、徳川家もその構成者のひとりとして参画すべき」という点において、二人は一致した思想の持ち主であった。もっとも、「治政権力としての徳川政権の意味を分かったうえで時代に鑑みて徳川離れの流れを是とする」という共通認識に立っても、それに至る発想土壌は、当然ながらまるで異なる。海舟においては上記のような前半生のせいで、幕府への基本的忠誠心、帰属意識は薄く、多くの旧態固陋の幕臣への侮蔑、諦観があり、立場に拘らない放埒かつ自由な発想と行動力を育くんで、そこに思想の源がある。一方、一翁においては、徳川家からの恩恵に浴しつつも、「幕臣として真っ当に考え、その結果として、徳川家への忠誠心と矛盾のない形で」海舟と同じ結論に達している。そこに彼の不思議で先駆的な妙味がある。ただ、海舟においてはその経歴から「異能な跳ねっ返り」で済まされるところが、一翁においては徳川家臣同類の中に理解してくれる人が少ないという意味で、「浮いた幕臣」とされ続ける煩悶があった。彼の登用、罷免、復活の繰り返しの人生はそこに所以がある。

大久保一翁は、文化4年（1817年）に江戸二番町に旗本大久保忠向の長男として生まれ、幼名を金之助と称した。天保元年（1830年）将軍家斉の小納戸役として出仕し、その後諸大夫2) となり志摩守を名乗った。家斉が大御所として西の丸に移った後も臣従し、同12年（1841年）新将軍の家慶の小納戸役に転じて右近将監と名乗り、家督を継ぐと同時に忠寛と改名した。将軍家定の世になっても同様に勤仕したとある。

父忠向は、大番という三河以来の騎馬武闘集団の流れを汲む無骨で剛毅の人であり、母も弓頭の娘であったことから、一翁は幼いころから武士気質に富んだ家庭環境に身を置いた。しかし、11代から13代の将軍に近侍し、敢えて今風に擬えれば、三代に亘り総理秘書官を務めたようなものであり、その間に文事にも趣を広げ、書、漢学、国文、和歌などに

2) 諸太夫とは、時代により意味合いが異なるが、この場合は四位、五位以上のお目見えの資格を言う。



大久保家関係系図

も精進した。そして、そのように精励するうちにその働きぶり、才能の凡ならざるに目を付けられ、「目付」拝命の上「海防掛」の一員に抜擢をされた。嘉永7年（1854年）5月、忠寛38歳のときのことである。「海防掛」とは、老中首座阿部正弘が時節の急なるに対処するための中核戦略部隊を作るべく、若手俊英を集めて新設したものである。海防掛はその正式名称が「海岸防禦掛」であったように本来は海岸調査、防御策の策定など軍事的な性格が強かったのだが、外国船の来訪を目の当たりにしてそのような対応では覚束ないとして、外交使節への応接、折衝が中心となっていった。その海防掛にあって、以前の稿でご紹介したように、岩瀬忠震、水野忠徳、永井尚志らが外交官的素養で活躍したのだが、一翁はそれとは異なり、水戸藩、越前藩など有力藩の要路と秘かに折衝し閣内周旋をするといった内務官僚的な活動を得意とした。そんな役割もあって、同じ海防掛であっても、忠寛（一翁）の名はこの時期の表の歴史にはほとんど登場しない。

但し、この間に重要な出会いがあった。阿部正弘の改革の本旨は、門閥や身分にとらわれず自由かつ広く有志の意見を募るという点にあったのだが、それに応じてきた勝麟太郎（のちの海舟）の意見具申「海防意見書」に着目して、これを取り上げたのが一翁であった。これが海舟を歴史の表舞台に引き上げる契機となったのであり、ここで漸くにして本稿の重要人物の接点が繋がるのである。勝は、これにより無役の小普請から蛮書翻訳所（調所）勤務となり、以降海軍武官、海洋技術者として活躍の場を切り開いていく。

一方、一翁は海防掛の一員として貿易取調御用という対外貿易を進める任に就き、同時に蛮書取調所の総裁を兼ねるようになる。海外事情研究、兵器研究、外洋航海術、翻訳官養成などの業務の統括というのがその役割である。

その後、堀田正睦の外交事務取扱（事実上の外相）発令、貿易差し許しの沙汰など開明派の改革が進んだのだが、阿部正弘の急死を契機に、それが一転「揺り戻し・反動」の流れとなり、井伊直弼の大老就任、将軍交代、安政の大獄に至る展開となる。この間の国内、対外政治の過程はとてつもなく複雑で、それを事細かに追うのは本稿の趣旨ではない。ただ、一翁自身については、幸か不幸か、岩瀬などほかの海防掛の動静が政治の局面と不可分であるのと異なり、その中央での足跡は急に途絶え、表舞台の展開とは距離のある雌伏の時期に入る。

その原因は、安政4年1月長崎奉行への発令を断ったことにある。当時長崎は唯一の貿易港であり、また外交事情を把握するには絶好の場所であった。また、そこの奉行職は役目の性格上「うまみ」もあり、旗本、幕臣の間では垂涎の役職であった。阿部正弘にしてみれば、能吏ではあるが些か謹厳剛直過ぎるし、対外政策の経験も十分とは言えない一翁を長崎に遣り、いろいろ外交、貿易の勉強をさせてその大成を支援し、少しは丸くなったところで中央に戻そうという「親心」から出た人事であったろう。そのポストを彼は蹴ったのである。確かに、前年の夏、秋に大病をして体調が十分でなかった。また、幕府の役職は奉行に限らず本人だけ赴任をして務めるというのではなく、家臣もろとも引き移って請負的に仕事をする形であったので、五百石の小身で譜代の家臣に乏しい者には荷が重いという面はあった。しかし、本音はまさにその職務の「うまみ」ゆえに、自身の悪を憎む性格、気質では「悪弊に染まる奉行所の指揮は執れない、お断りだ」とするものであった。

折角の思し召しなのに、また下命謹従の幕臣のはずなのに、何をか謂わんやである。その発令辞退は幕閣でも「さすがに骨っぽい」と評判になったが、さりとて辞令拒否をそのままにはできず、駿府町奉行に左遷となった。この左遷がのちに結果的に役に立つのだが、それは後の経緯で触れる。

有為の士には安閑すぎる駿府でのお務めを経て、約1年の後、一翁は京都禁裏付に発令される。皇居を守護し、人の出入りを監視し、宮中要務を管理する役目である。前後して朝廷とは条約勅諚など重要な局面になっていき、その間多少の機微に係る事案もなくはなかったものの、駿府から京都在勤にかけ、一翁は政局からは一歩も二歩も引いた傍観者的な立場に居た。井伊大老の登場に伴い、かつての海防掛の同志が次々と井伊に排斥される中、一翁は中央に居なかったせいで、以前の水戸藩などとの関係をすぐには「やり玉に挙げられる」こともなく、また井伊派の誤解もあって、あろうことか京都町奉行に昇任登用されたりしている。

しかし、そのような状態は長くは続かなかった。執拗な反対勢力の追及を進める幕府探索方に、水戸藩の藤田東湖や排斥された岩瀬忠震や川路聖謨らとの以前の関係などが露見てしまう。更には安政の大獄に批判的な一翁が、大獄推進の手先として専横的にいきりたつ京都奉行所内の与力、捕り方の所業を問題にして、自らこれを摘発するに及んで、井伊派から「危険要注意人物」と見做されるに至ってしまう。一翁は安政6年6月西丸留守居役の閑職に、そして間もなく寄合に飛ばされた。寄合というのは小普請と同じく「無役の旗本」という意味である。京都禁裏付から寄合までわずか8ヶ月の出来事であった。

ところが、時局の展開は目まぐるしく、安政7年3月井伊直弼大老が雪の桜田門外に倒れ、安藤信正が老中となると、安政の大獄処分の緩和、所謂改革派幕臣の復活が図られた。早々に水野忠徳が外国奉行に再任され、一翁も蛮書調所勤務に復活した。更に、安藤が坂下門外で襲撃されて退くと、その後の体制で一翁は一気に大目付を拝命し、松平慶永と連携して、幕閣に根強くある水戸人脈（斉昭、慶喜）への反感、警戒心を宥め取り成しをして、慶喜の将軍後見、慶永の政事総裁職就任を実現している。そして遂に、文久2年（1862年）7月、一翁自身は側御用取次に昇進している。この役職は、その名称こそ茶坊主の伝令役みたいな響きがあるが、将軍に上がる全ての文書を司り、将軍の決裁を得たうえ結果を老中に下げおろすという「権力行使の枢密ルート」である。大目付にしろ、側御用取次にせよ、旗本幕臣にすれば最高のポスト[3]である。

さて、さて愈々事務の元締めとして幕末処理に辣腕を振るい始める……というようには展開しないのが、幕府官僚機構の難しいところ。同年11月「側御用取次の分限で差し出がましい」との大仰な沙汰を以って、突如講武所奉行に左遷され、加えて京都町奉行時代の「お役（大獄推進）不束の儀」を蒸し返されて奉行職をも罷免され、「差控」謹慎処分を受けてしまう。またしても表舞台からの追放である。政権中枢の重い職責にあるのに、それでも「差し出がましい」として糾弾されたのは、「大開国論[4]」という一翁の献策であった。この「大開国論」とは、要するに「大政奉還論」である。

その中身については、彼が色々な要路に話をし、相手により論旨表現に若干の相違はあるが、その献策に曰く、「幕府が政治の独占を棄て去り、朝廷を

3) 側御用取次に就任の際、その役割の重大さに見合うよう、一翁は千石に加増の沙汰を受けている。しかし、彼は、「徳川の家臣として職務に精励するのは当然であり、その限りでの手当は頂戴するが、家の家格とは無関係である」からと言って、五百石分は足高（在任中の職務給）にして欲しいと加増を辞退している。彼らしいといえば彼らしいが、それ以降、この職に補任される幕臣は同じようにさせられるという「トバッチリ」を受けた。

4) 話の主軸が分かりにくくなるのを避けるため本文では触れていないが、一翁の「大開国論」は坂本龍馬をいたく感激させている。もともと幕府側の奸物たりとして海舟を斬りに出かけた龍馬が、逆に海舟に感化され立場を越えて私淑した話は有名である。一翁が差控処分で謹慎している文久3年頃、龍馬は海舟の紹介で沢井惣之丞とともに一翁の自宅を訪れ、一翁から「大開国論」を聞かされている。のちに後藤象二郎、山内容堂を介して大政奉還の舞台回しが動いていくのであるが、龍馬のその後の動きがこの時の話を啓示とした可能性はある。

勝海舟・坂本竜馬師弟像（東京都港区　海舟が明治5年から同32年に死去するまで住んだ屋敷跡にこの像がある。地元の関係者が全国から協力を仰いで平成28年に建立。像は山崎和國氏の作）

中心に衆論を集めて国是を定めるような新しい国家体制を作り、徳川家も諸侯の一つとしてそれに参画し、開国に向かうべし」。山内容堂にはやや慎重に説いているが、松平慶永、横井小楠など同志的相手には「もし朝廷がどうしても攘夷を成すと拘（こだわ）れば、政権を朝廷に奉還し、徳川家は神祖の地である駿河、遠江、三河の州を請い受けて諸侯の列に降りるべし」とまではっきり述べている。松平慶永、山内容堂たちも、慶喜には「政権返上の覚悟をもって対処を」と督励したりしているが、「実際に政権を離脱せよ」とまでは言っていない。彼らにしても「大久保の卓識なりと感服せり」などと言いだすのはもっとずっと後のこと。最初は「大久保は狂人かと大いに憤怒を生ぜり。満幕府これを喜ぶものなく、ただ怨悪するもの多し[5]」という有様であった。

周囲の受け止めは厳しかったが、典型的なエリート幕臣がここまで考えたということには、やはり追加の解説が必要であろう。まず、当時の外国に対し

大久保一翁屋敷図（安政3年「三番町界隈図」より作成　江戸城を守る「大番組」の旗本の屋敷は城の西側一帯に集められ、現在の千代田区九段に近いこの界隈は「番町」と呼ばれ、東西南北の伸びる道筋は「〜番町通」と称した。一番町から六番町まであり、図の辺りは三番町通である。図の☆印の場所は明治になり連合艦隊司令長官東郷平八郎が長く住んだ屋敷跡であり、現在は東郷元帥記念公園になっている。）

「和か戦か」という政策の軸の立て方がそもそもおかしいと論じる。自らの軍備と外国のそれを比べて有利なら戦う、不利なら和するという強弱の便宜ではなく、世界に通用する公明正大な政策を掲げられるかどうかが重要で、それに天理があればそれを聞かぬ外国の方が悪いのだから、勝敗を度外視して戦うべしとする。そのためには立場の違いを超えて挙国一致の国是を定める必要があり、徳川家が独占的施政権を返上して他藩の信用を醸成した上で、朝廷を中心とした政体に移行すべしと展論する。その際、狭い主従関係での忠義、面目、恥と言った武士道的モラルは二の次にして「幕府の方から解体を主導」するべしという。「今の幕府ではだめだ」という点では一翁と海舟は意見が一致していたが、一翁の手法（アプローチ）は、海舟の「雄藩連合で新しい政治勢力を結集して幕府にあたる」という外から作用させるというそれとは根本的に異なるし、辞官納地や議会制度の先取りみたいな面すらある。歴史は結局そのような方向に進んだのであるが、それは「後追い講釈」。いずれにせよ、実際に大政奉還がなされる時期に先立つこと5年も前の段階では、考え方が「相当過激であり（ぶっとんでいて）」、周旋の上手（うま）い下手（へた）の次元の問題ではなく、「発案者とその中身」は看過しがたいものであった。時代の流れの中での常で、先駆者というのは排撃される運命にある。

なお、誤解があるといけないので付言しておくが、一翁の左遷は、幕閣の同僚が並の役人発想としてついていけずに、その判断で異分子として一翁を排除したというほど単純ではない。一翁は大官であり、流石にもっと大きなレベルでの判断があった。先に井伊派から睨まれて云々と記したが、それは一翁が彼らから所謂「一橋派」と見做（みな）されたからということだが、実はその一橋派からも一翁は「睨まれていた」のである。慶喜は一翁が嫌いであった。はっきり「資性偏固」と一翁を評しているし、京に在勤中奉行に昇格したのは井伊派の勝手な誤解であって一翁に責任はないのであるが、慶喜は「やはり一翁は井伊派に対し何らかの貢献があった筈だ」とみた。慶喜もなかなかの粘着質である。しかも、上述の「大開国

5）これは、松平慶永の「閑窓乗筆」からとったが、これは明治16年の回想記録である。最初にその説に接したときの幕府内の感想は、恐らくもっと激烈であったと思われる。

論」の献策である。歴史は最終的にそういうベクトルで展開するのであるが、自らの「大政奉還」の最終決断に先立つずっと前の時点で、慶喜がこれを好ましく思うわけがない。慶喜にすれば、幕吏の身にありながらの一翁の献策は度を越しており、将軍の地位を蔑(ないがし)ろにするような思想は断じて容認できるものではなかった。

大政奉還の図（東京聖徳記念絵画館に所蔵される二条城二の丸御殿での「大政奉還図（頓田丹陵画）」とされる絵画である[7]。）

何度目かの雌伏の期間であったが、今度は長かった。一翁が再び活躍の場を得てその真骨頂を発揮するまでに5年を要した。もちろん、この間一翁の身にも諸々の経緯があるにはあったが、時局に変化をもたらすこともできず、一翁は隠居してしまう[6]。

一方、時局の方は関係者の回避努力も虚しく実行されてしまった第二次長州征伐は、幕府の統率力の欠如を暴露するだけの結果となり、薩長の同盟もあって幕府の命運は急速に際どさを増した。

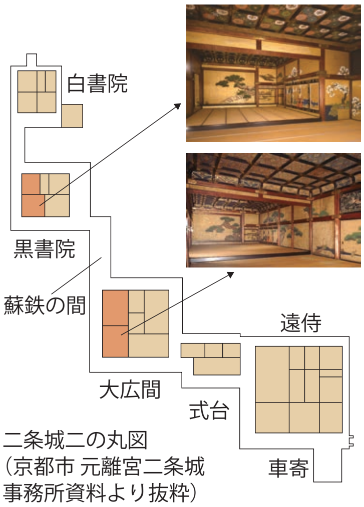
混乱の中で将軍家茂が没し、慶応2年（1866年）愈々慶喜に15代将軍の宣下がなされた。彼は「英明切り札将軍」との期待を背負って幕府機構の改革に乗り出した。慶応2年から3年にかけ、陸軍、海軍総裁の他に国内事務、会計、外国事務を司る三総裁を新設し、ひと呼吸おいて遂にこの会計総裁に一翁を起用した。慶喜が個人的に一翁を好ましく思っていないことは前述の通りであるが、すでに一翁に匹敵する人材は払底していた。隠居後の人物の起用も異例であった。なお国内事務総裁は間もなく廃され、また前後して老中職がなくなったこともあり国内に関する事務は須(すべか)らく会計総裁の元に収斂した。一翁は若年寄の発令も受けている。因みに、多少時期の前後はあるが、陸軍総裁は勝海舟、海軍総裁は矢田堀鴻（副総裁は榎本武揚）、外国事務総裁は山口直毅という布陣である。

幕末の討幕軍との攻防とは国内陸上戦であり、ここに幕府側の軍を代表する勝海舟と国内の軍事以外の事務を統括する大久保一翁という組み合わせが整ったのである。

漸くにして役者が揃って本稿主題のお膳立てができたのであるが、慶応2年から3年というのは幕府にとっての大激動期であって、この間少なくとも2つの大政事があった。ひとつは慶喜による「大政奉

6) この間、禁門の変の前後に、一翁は幕府の財政難対応をゆえに勘定奉行を命じられ、第二次長州征伐にも召し出されたりしたが、征伐自体に異を唱え数日でお役御免となっている。第一次と異なり将軍の出馬こそなされたものの、最初から面目維持の算段のみを考えるに業を煮やし、一翁は最後の手段として薩摩藩の調停を具申するもそれも容れられなかった。その後も度々の出仕を求められたが、愛想をつかした一翁はこれに応じることなく、正式に隠居して家督を長男の市三郎（のちの三郎）に譲ってしまっている。ずっとこの稿では一翁で通してきたが、これを機に一翁と称した。それまでの公式の場面では伊勢守、越中守などの呼称が使われている。

7) この大政奉還図については、本稿の趣旨とは関係ないが、いささか曰くがある。申し渡しは「大広間（92畳敷）」に於いてとされ、実際に二条城を訪れると大広間にはその旨の解説があるのだが、二条城の実際の大広間の奥及び両脇の襖絵は狩野探幽による松の絵柄である。一方、この画は脇の襖絵が桜の図柄となっており、一の間と二の間の構造に鑑みても「黒書院（56畳敷）」の可能性が高いという。聖徳記念絵画館にある絵画の解説でも「黒書院」との記載になっている。慶喜将軍は在京の比較的少数の有力大名を二条城に招致し大政奉還の意向を直接伝えたとされ、幕府実務としては別の日に10万石以上の在京の藩重臣を大広間に集め大政奉還決意書を示したとある。仮に画が後者の場面だとすると、脇襖絵の問題のほかに、真ん中に座しているのは慶喜将軍ではなく老中の板倉勝静ということになるが、それにしては上座の人物がいかにも将軍然としていて、不自然である。絵師の勘違いなのか、解説の不整合なのか？）



二条城二の丸図
（京都市 元離宮二条城事務所資料より抜粋）

還」、もうひとつは鳥羽・伏見の戦いである。大政奉還は討幕軍に「討幕」の名分を失わせ、爾後の主導権を慶喜側に引き寄せるための戦略行動であったが、鳥羽・伏見での不戦敗的撤退は幕府側の「敗け」を決定づけた。以後、慶喜はひたすら「恭順」の過程を辿った。そして、愈々西郷隆盛と勝海舟との江戸城明け渡し交渉の場面に至るのである。

あまり不思議に思われていないのだが、この陸軍総裁たる「実質」は異例である。西郷隆盛は征討軍の事実上の総帥であるが、一方この時点で陸軍総裁たる勝海舟の麾下には幕府軍なるものはいない。少なくとも鳥羽・伏見の戦いまでは幕府軍はそれらしい統制下にあった。しかし、慶喜が江戸に逃げ帰り江戸城での評定を振り切って恭順してしまった後は、佐幕藩の兵力はそれぞれの藩において逼塞したり、各々の判断で抗戦の準備をしており、旗本の多くも慶喜の指示に従い恭順し、さもなくば逃げ出すか、上野などに勝手に立て籠っていた。海舟の号令に満を侍しているような纏まった正規勢力はほとんど存在しなかったのである。今更ながらではあるが、海舟は海軍が専門である。本稿の冒頭に記したように、「いざとなれば江戸の街を焦土にする手筈を整えた」侠客、火消しの人々が「海舟親分」の「手下」と言えば言えるが、いずれにせよ討幕軍から見て武力衝突の相手たる幕府軍を勝海舟が束ねているわけではなかった。

にも拘らず、隆盛が頂上会談で彼を相手にしたのはなぜか。「江戸の街」は、討伐軍にとってその後の兵站その他の軍事展開の基地となり、権力奪還後は施政の基盤になるはずの地であった。その「江戸の街」を人質に取ったのが海舟であり、その海舟の後ろにその意向に沿って諸々の仕切りを確実にできる実務官僚がいて、この二人がいずれも「開明派」として交渉相手になりうるという確信[8]が、西郷以下の討幕側にあったからである。

一方、当時の幕府内部の実情はどうであったのか。先ほど、慶喜が大坂から軍艦で逃げ帰った後の江戸城での評定について触れた。その場では主戦論が圧倒的であったが、肝心の慶喜が煮え切らず、小栗上野介や榎本武揚の必死の諫言を振り切って恭順と決してしまった。恭順が沙汰されると、「満城の士が泣き出すもあり、落胆するもあり……（立花種恭・若年寄/談話）」という有様で、状況を嘆いて若年寄、大名領主の一部に自裁する者がでるなど混乱の極みとなった。しかし、慶喜の決断については、時勢を達観し、俗論に流されずこれを是とする覚悟の幕臣がいたのも事実である。この辺りについては、主戦論派からみた史実描写は沢山あるのだが、一方、決した恭順をどう進めるかの算段についての記述は少ない。当時の有様を同僚（平山省斎・若年寄）に宛てた一翁の書簡に見ると、「ご恭順御尽くしの他これなきに候えども、……（中略）……彼（討伐軍）より探人入れこれあり……見透かされ候ては残念の至りにて候。右様なことは、勝安房（海舟）並びに、及ばずながら愚翁にお任せ下され候えば、薩長如きの胆は破るに足り候。」とある。幕府内部でもこうした気概を示した者に頼むしかない状況であった。

京を発ち、東海道、中山道、北陸道の三方面からひたひたと江戸に迫る討幕軍は、3月6日の評議で江戸への総攻撃を3月15日に設定するとともに、幕府に対し次のような条件を突きつけた。

- 徳川慶喜の身柄は備前藩預けとすること。
- 江戸城を明け渡すこと。
- 幕府所有の軍艦を全て引き渡すこと。
- 武器を全て引き渡すこと。
- 城内の将兵は向島に渡って謹慎すること。
- 徳川慶喜の暴挙を補佐した者を厳しく調査し、処罰すること。
- 暴発の徒が手に余る場合、官軍（討伐軍）が鎮圧すること。

これらの条件はパッケージであり、江戸城の総攻撃期日を示すことによって、討幕軍としては「take it or leave」の交渉を迫ったものである。恭順を示した幕府（将軍）からすると、城の明け渡しを含めいくつかの項目は敗軍の立場として甘受すべきものであったが、最大の課題は慶喜の身柄の処置にあり、

8) 討幕軍側の江戸攪乱戦術や探索活動などは多面に展開されていた。幕閣内の議論、人脈を探るについても、本文のこのすぐ後に引用されている書面に「探人入りこれあり」とあるように、間諜（スパイ）を入り込ませていた。

受忍できる項目も他の項目との絡みがあり簡単には受け入れられなかった。

当時の備前藩主の池田茂政は、水戸育ちで慶喜の2歳下の実弟である。倒幕軍としてもそれなりの配慮を示したものであっただろうが、慶喜の処置については討幕軍の中で最終の判断がなされておらず、切腹、家の断絶を主張する向きも少なからずあった。池田家は元々外様大名であり、自ずから藩士たちも徳川家に対して絶対的な敬意や忠誠心を有しているわけでなく、まして備前藩の藩論は勤王討幕に大きく傾きつつある時期であった。そんな中でこの大名家に預ければ、慶喜の生命の保証がないと深刻に危惧されたのである。また、慶喜の生命さえ確保できれば良いというのではなく、家の存続ならどのような中身にするか、さらに他の条件も、いざ遂行するに当たっては簡単にはいかない事情が多々あり、其々が絡みのある内容であった。パッケージディールというのはそういうことである。

ただ、軍事的にギリギリと切迫する情勢に鑑みると、これらの詳細を一括して合意するには、何しろ時間がなさすぎた。勢い、肝になる点を原則了解(「大枠合意」)して、その他の詰めはその後にやるという展開になった。この場合の「肝」とは、慶喜を「幕府側から見ても納得のいくところへ預け」てその後の安全を確保するとともに、江戸城を明け渡すことを約して、総攻撃を回避させることであった。その意味で、そこがポイントになるという交渉をするんだということをお互いが了承することが重要で、それには双方の代表である西郷と勝とが信頼に基づき「握れるか」どうかが決め手であった。3月13日からの頂上会談の意義はそこにあった。その結果、この二人の大局観、使命感がぶつかり合った上での信頼関係で「大筋で握れた」ことの価値は極めて大きい。二人の会談が歴史的偉業とされるのは正当な評価である。頂上会談の場所には、高輪の薩摩藩下屋敷、田町の薩摩藩蔵屋敷[9]が使われた。

しかし、神は細部に宿るのである。大筋以外の実際の仕切りや詳細の詰めは別途あったのであり、幕府にあってはそれが一翁の双肩にずっしりと圧し掛かかったのである。

本稿の冒頭で「そっちの方」を気にした海舟にしてみると、大枠の交渉はできそうだが、全部自分(海舟)ではできない相談なので、あとは任すけど、その分も含めてやれると言って西郷に「請け負ってきていいか」という問いかけであった。少し時間を飛ばすが、結局のところ西郷との会談で総攻撃が回避されて[10]、粛々と城の明け渡しを受けるために4月

西郷隆盛、勝海舟会見史跡と会見図(東京都港区 JR田町駅の近くに西郷―勝の会見史跡の碑がある。旧薩摩藩邸の場所である。現在は一帯が工事中にて史跡碑も別の場所に一時保管されている。なお、真ん中の「江戸城開城談判図(結城素明画/聖徳絵画館所蔵)」についてはかねて気になっていることがある。会談場所が薩摩藩邸であり、また勝海舟は客分であり公儀代表でもあるので、彼が上座にあるのはよいとして、交渉の席で彼は刀を自らの左手に置いているのである。これは、油断のない構えでいつでも刀にモノを言わせるぞという「抜き打ち座」という置き方である。一方、西郷隆盛の方は脇差のみである。本文にあるように、両者は一定の信頼のもとに対座しているはずなのであるが、やはり、勝から見ると交渉次第ではいかなる事態も想定されるが幕府側の対応には制約があり、背水の陣で臨まざるをえないという緊迫した状況を示しているのであろう。

9) 三田の薩摩藩上屋敷は、薩摩藩による江戸騒擾の拠点として咎められ、小栗上野介などの指示により庄内藩など諸藩が焼き討ちにしていたので、14日の会談には湾に面した蔵屋敷が使われた。時間を遡ると、この焼き討ちこそが鳥羽伏見の戦いのきっかけとなったとされており、一旦とはいえは西郷との会談の場所に擬されたことには因果を感じる。

4日に「勅使入城」がなされたのだが、勅使を受け入れた場に海舟はもはや居ない。

朝廷からの勅使を奉じて西郷隆盛以下が入城し、徳川家は田安慶頼（松平慶永の弟）を筆頭にして一翁以下の幕臣が出迎えた。その場で、「慶喜は死罪一等を免じて、水戸にて謹慎。江戸城は尾張藩に管理させる。」旨のお達しが正式にあり、他に武器、軍艦の引き渡しなどの命令が改めてあった。海舟は、西郷から既に「慶喜の水戸謹慎」の感触を得ていたから城の明け渡しを飲んだのであり、あとは適宜任すという気分であったのであろう。

しかし、江戸城を尾張藩に管理させるという案は幕臣の琴線に触れたし、武器などの引き渡しも簡単ではなかった。さらに徳川宗家の後裔を同じく尾張藩の元千代（のちの義宜）にするとの噂が流れて幕府側では騒然たる雰囲気となり、再び海舟の出番となる。但し、相手は先鋒軍参謀の海江田武次（薩摩）と木梨精一郎（長州）であり、実務の話もあることもあり、海舟はその交渉に一翁を連れて行っている[11)]。

江戸城の尾張藩管理がなぜ微妙であったかというと、尾張藩は御三家の中で遂に将軍を出さず、徳川治政下を通じ将軍家とは些かの距離を保つ趣があっただけでなく、幕末の佐幕か否かの政局でいち早く朝廷側についたことが幕府から見て「引っかかった」のである[12)]。一方、武器、艦船の引き渡しは難渋した。「全て引き渡せ」と言われても、一翁らとしては恭順はしたものの徳川宗家の処遇が未定であり、その存続を求める以上、兵力の備えのない宗家など想定できないと言い張って、要るだけの装備は持ち続けると頑張った。また、一定の武器や貯蔵物資は引き渡すにせよ、現在それらを管理する歩兵や貯蔵庫、工場の守衛らも一緒に引き取ってもらわないと、役目を失った彼らの挙動に責任が持てないと食い下がった。難問は艦船の処理であった。一部艦船は既に引き渡してあったが、軍艦でない輸送船は幕府側に返せと談じ込み、一方軍艦の多くは我々（海舟、一翁）の掌握の及ばない状態にあるとして、申し訳なげに言を左右（はぐらか）した。

4月10日までに「やむを得ない」との先鋒軍参謀筋から譲歩を引き出すと、翌11日に一定の武器・資材の引き渡しを早々に完了している。引き渡しに際して、一翁はそれを指揮した立場に鑑み、のちの憂いをなくすため、城にあった文書は勿論、自らの日記、文書に至るまで悉（ことごと）く焼却破棄している。彼の治績資料の少なさの所以（わけ）である。

12日になって榎本武揚が軍艦8隻を引き連れて館山に逃れるという「事件」が起き、その後彼らは東北、函館に向かったのであるが、流石に討幕軍から叱責と取締の指示が来たものの「後の祭り」であった。この間、海軍総裁は「何故か」雲隠れしている。

そして、4月29日に至り、大監察使三条実美より「宗家の家督は田安亀之助（のちの家達（いえさと））に引き継ぐこと、駿河70万石に移封とする」旨の沙汰が、正式にもたらされた。これによって、漸くにして懸案の主

10) 西郷は勝との会談ののち急ぎ上京し、そこまでの対応とその後の処置の大枠につき、朝廷の裁可を得ている。最大の課題であった慶喜の処置に関しては、それに至るまでに、幕府にあった二人の女性、将軍家定の妻・天璋院篤姫、将軍家茂の妻・和宮のルートで薩摩藩や討幕軍を率いた有栖川宮熾仁（たるひと）親王宛に助命嘆願がなされたし、英国公使のパークスによる「恭順している者を攻撃するのは万国法違反である」とのクレームがあった。それぞれがどの程度奏功したかは不明であるが、討幕軍の重要な意思決定は基本的に西郷一人が下していたと考えてよいと思われる。

11) 西郷と海舟との歴史的会談は「一対一」の遣り取りであるように伝えられているし、海舟自身がそのように公言しているのであるが、山岡鉄之助（鉄舟）が身辺警備の役割を兼ねてずっと同席しているし、14日には一翁も同行したとの記録が残っている。とりわけ、山岡鉄舟にあっては頂上会談に先立つ3月9日の段階で、静岡まで進軍していた西郷と秘かに接触することに成功し、慶喜の蟄居先案についての幕府側の強い違和感をいち早く伝えて、本件取り扱いの機微さを予め討幕軍側に刷り込むという重要な役割を果たしている。西郷からの本件全体に係る譲歩は、事実上これによって道筋がつけられたと言っても過言ではない。この緊迫する最中（さなか）での密行、討幕軍総師西郷への接触には、「朝敵徳川慶喜家来、山岡鉄太郎罷り通る」と大音声を発して敵陣を歩いたとする豪傑談が伝わるが、江戸市内騒擾の中心人物としてかねて幕府側に捕らわれの身になっていた西郷腹心の益満休之助が道案内をしたとも言われる。この辺のいきさつや双方の心の通わせ方には面白い趣があるのであるが、これ以上に深入りしない。なお、山岡鉄舟は剣，禅、書の達人であり、勝海舟、高橋泥舟とともに「幕末三舟」と言われるほどの傑物で、視点を変えてその功績を論ずると、この稿と同じくらいの質量の評伝になりうる人物である。父が飛騨郡代を務め、若き日を飛騨高山で過ごした関係で、高山陣屋前に若き日の鉄舟像がある。

山岡鉄舟像
（ウィキペディアより）

12) 江戸城管理の機微は、討幕軍側でも容易に理解された。最終的には「一連の処置が済んだら、（宗家の後裔を出す）田安家に戻すべし」との沙汰がなされた節がある。しかし、江戸城は時間をおかず天皇行啓を経て皇居とされたので、その繋ぎの間の管理はそれ以上の意味はない。一方、引き渡された武器の管理については、熊本藩がこれに当たったとの記録がある。

要部分に目処がついたのである。一連の過程で、一翁は一身を賭して、海舟を補佐し、請役人を督励して勅使一行を江戸城に迎え、さらに武器・資材を混乱なく引き渡すという「敗戦処理」作業に邁進した。

このあと、一翁の関心は宗家の駿府への円滑な移住に移る。彼は新たに設けられた「中老」という職責に就き、以前この地に赴任していた経験をも生かして奉公に勤めた13)。

改めて、そこまでの推移を振り返ってみたい。

江戸城無血開城が、幕末顛末の出来事として決定的で最大のものであったとするかどうかには議論があろう。しかし、江戸の街並み、民衆の生活と産業、インフラがほぼ無傷で保持、引き継がれ、活かされたことの意義は量り知れないほど大きい。当時、江戸は人口100万人、既に世界最大の都市であったし、我が国の行政の中心であった。仮に折衝のちょっとした綾の行き違いでこの街が焦土化されていたとすれば、民衆の被害は凄まじく悲惨であったであろうし、新政権は恐らく焼け野原の江戸を拠点にした施政を敷けなかった可能性が少なくない。東上した新勢力としては、依拠するに江戸は唯一無二のものではなく、恐らく京都か大坂を本拠とした新政府が出来て、今の皇居、東京、或いは日本の国土は別のものになっていたかもしれない。

江戸の開城は、時間的には幕府と討幕軍との鬩ぎ合いの終着点ではなく、そのあとの東北から函館に至る「内乱（戊辰戦役）」の序章でしかなかった。しかし、仮に交渉が決裂すれば、「攻め落とさん」とする側に背水の構えで抵抗する構えをとっていた以上、江戸城だけでなく江戸の市街の焦土化は避けられなかったであろう。そうなっていれば、その後の倒幕軍の行軍、補給線の設計は歴史のようには行かず、またその事態は即ち恭順が破綻したということであり、佐幕勢力の抵抗も倍化したと想像される。結果として内乱状態が長引き、最悪の場合、列強につけ入る隙を与えていたかも知れない。いずれにせよ、いわゆる維新の国づくり、近代化はずっと遅れ、或いは違った形になっていたかも知れないという意味で、この時点での平和裡の江戸開城の意義は大きかった。また、退く側としてもそれに絡めて「取るべきものは取る」ための粘り強い交渉が展開され、然るべき成果を見た。だからこそ、海舟や一翁は「頑張った」のである。結果、慶喜が一命を永らえて徳川宗家が維持されただけではない。将軍の処置がそうなら、当然他の幕臣、大名の多くも寛典・寛如され、命に係わる断罪も回避されたのである。

一翁は、「敗戦処理」の最後ともいうべき徳川宗家の駿府移住、定着のために務め、これを成し遂げ、版籍奉還後の新静岡県の権大参事として政務補翼（徳川家の家令的な役割）もこなした上で、明治4年2月、病気、老齢を理由に官を辞した。静岡郊外の小鹿村に寓居を構えて、漸くにして本当の隠居生活に入った。

……ところが、「入った……つもり」ではあったが、その後も彼の出仕を、しかもそれも新政府からそれを求める声が絶えなかった。以下は、本稿の趣旨に照らせば蛇足に近いのだが、一翁の生き方の一端が

大久保一翁像（帯刀しており明治初期のものと思われる。Tokyo Museum Collectionより）

13) 2021年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」で、訪欧使節団に随行して帰国した吉沢亮演じる渋沢栄一が駿河藩を訪れ、使節団費用の残金の返却を申し出る場面があった。それに応対したのが当時藩の中老であった大久保一翁である。木場勝已が一翁を演じ「いい味」を出していた。当時の政府の海外派遣使節団では、不足は追加請求し、余れば使節団が適宜着服というのが慣例であったが、渋沢は余剰を現地で運用し膨らました上に返却に及んだのである。一翁はその才覚と姿勢を評価し、渋沢を藩の勘定方に推挙して藩に残された太政官札の活用を任せ、さらに政府出仕の後押しをした。二人の縁はそれに留まらず、後に一翁が東京府知事の折、貧困・病気療養施設として渋沢が設立した「養育院」の公営化・運営でも協力している。

窺い知れる「余生余話」として追記する。

実務家人材に厚みのない新政府にとって、旧幕臣は無視できない人材の宝庫であった。明治5年初から始まった一連の「大赦[14]」により続々と旧幕臣の登用が進められた。最後まで抵抗した逆臣榎本武楊は牢から釈免され親類預けとなり、日を置かず開拓使四等出仕に、永井尚志、大鳥圭介は放免ののち左院の少議官に発令されて正六位に叙され、矢田堀鴻も工部省六等出仕に発令された。それらと併せて勝海舟が海軍大輔に、一翁が文部省二等出仕の発令を受けている。榎本らが新政府内の思惑から前政権の地位からするとすこぶる低位での登用にとどまっているのに対して、海舟と一翁は特別の扱いである。それだけ、新政府においても二人の評価が高かったわけである。その後も数々の公職が割り振られた一翁であるが、実は殆ど見るべき業績を残していない[15]。象徴的なのが東京府知事のあと教部省を経て就任した元老院議官である。元老院[16]というのは、三権分立の体を作るため、司法府の大審院と併せ、立法府として明治10年に設立されたものである。ところが、一翁は在籍9年に及ぶ期間の660回の審議にわずか44回しか欠席しない精勤ぶりなのに、発言はたったの22回、しかも1回を除き「賛成」の一言だけしか議事録に記録がない。まさに「無言の行」である。幕臣としてひときわ能弁であった彼からは想像ができない所作であるが、彼にとっては、政権交代後は旧政権に身を置いた者は余計な口出しを控えるべき[17]との達観した境地であったろう。それならば、そのような役職を受けなければ良いというのは評としては浅い。「敗北の幕臣」として一徹に大事をやりとげたあとは、そこに列することを求められれば敢えて断りはしないが、内実に関わる領域には立ち入らないとする達観した佇まいであった。

「員に備わるのみ」と自嘲するような趣の文が残っているが、それは成しえなかったことへの悔悟というより、成しえた敗戦処理に対する剛直な者としての韜晦の念であろう。

明治21年7月、一翁は元老院議官在職のまま死去[18]。彼の辞世の句は「なにひとつ　世のためはせでまうつしに　のこす姿の　恥ずかしきかな」である。「員に備わるのみ」の趣旨に通じるものがある。政府の評価は別にあり、その功績を嘉し、死去を悼んで、従二位に叙している。

大久保一翁の墓（東京都府中市　多磨霊園　もともと青山墓地にあったものを昭和12年に改葬した。墓石の銘は勝海舟の筆になるもの。隣に妻の谷子、息子の業（なり）（鉄道技師）と立（たつ）（海軍造船中将）夫妻の墓もある。）

14）この大赦に際して、慶喜は従四位に叙せられ、松平定敬、松平容保、板倉勝静らの大名級も「（他家）お預け」を解かれている。

15）本筋ではないので、一翁の文部省出仕以降の東京府知事、教部少輔などとしての仕事ぶりを追うのは省略するが、敢えて彼らしいと思われるものを一つ挙げるとすれば、「東京会議所改革意見上申書」の扱いであろうか。これは、幕府時代の町会所の事業を引き継ぎ、東京市内の道路、橋梁、下水道などの整備、メンテナンスを東京府からの下請けだけにとどまらず、より広い意味での自治組織の自主事業として展開したいとするものであった。時の会議所は会頭渋沢栄一、副会頭福地源一郎（桜痴）といった旧幕府人であり、一翁は東京府知事としてこれに好意的に対応した。ところが、自主性を尊重し東京会議所を公選組織とするような改革意図が、中央からの管理、専制を目論む大久保利通内務卿の逆鱗に触れて、残念ながら「改革許可伺」は取り下げの憂き目を見た。

16）議会開設の前の元老院は立法府とはいっても、政府から提案のある法案を審議するだけで、院独自の発議権はなかった。ただ、その建前から、有栖川宮を議長に幹事陸奥宗光、議官に佐野常民、井上馨など錚々たる顔ぶれであった。議官は一等官待遇で一翁はのちに一連の功績により子爵に列せられている

17）先に述べたように、一翁の思想を伺わせる文書は限られているが、幕府時代の松平春嶽への書簡の中に「古店を譲った後は新店の者に万事任せるべき」との記述がある。

18）「余生余話」のそのまた余話であるが、一翁は「刀剣・虎徹の収集家」としても有名である。もともと刀剣には嗜好があり、特に江戸鍛冶の虎徹に入れあげ、家を売り払ってまで購入するほどであった。相場より高い価格で購入するため、それがため虎徹が市場から消えるようなこともあったようである。「長曾祢興里入道乕徹銘の虎徹」、「当麻の刀」（重要文化財）などが有名である。後者には、自作の和歌「由起布（ゆきふ）かき山もか寿（す）みて本能々（ほのぼのと）あけ行く春乃（の）多（た）まちのそ良（ら）」と「一翁」の二文字が金象嵌で彫られている。